

# 依他起性の理解に対する世親と陳那の差異について

陳 宗 元

## 一 はじめに

陳那 (Dignaga) は主要な著作『集量論』(Pratīyāsamuccaya) において、いわゆる三分説を提出している。しかも、その三分について「三分不異」(de gsum tha-dad du ma byas, 三分は別体ではない<sup>(1)</sup>) という説を述べている。その「三分不異」説には次のような意味があると示唆しているように思われる。

### 三分不異説

認識する知は形や働きから三つの種類に分けられるが、その三分は一つの知(自証知 Svasaṃvitti<sup>(2)</sup>)に属するという。

陳那は自証知の認識特性を説明するために三分説を提出しているが、その三分が形としては一つのものであるのか、或いは別々に存在するのかについて、「三分不異」という柔軟な言い方を用い、その関係を表現している。また『観所縁縁論』においては、「樂に随つて応に説くべし。(各自の解釈に任せる)」(大正三一、八八九上)とも述べている。それは三分

説か或いは一分説かを判断するのが陳那にとって容易ではないからであろうと考えられる。そして陳那の三分説を継承した護法 (Dharmapala) は更に四分説を提出しているが、彼は(相・見)二分が阿頼耶識の種子によって生じ、依他起性に属するので、仏智にも二分があり、二分は煩惱の根源ではなく、仏智による顕現のものであると強調している。

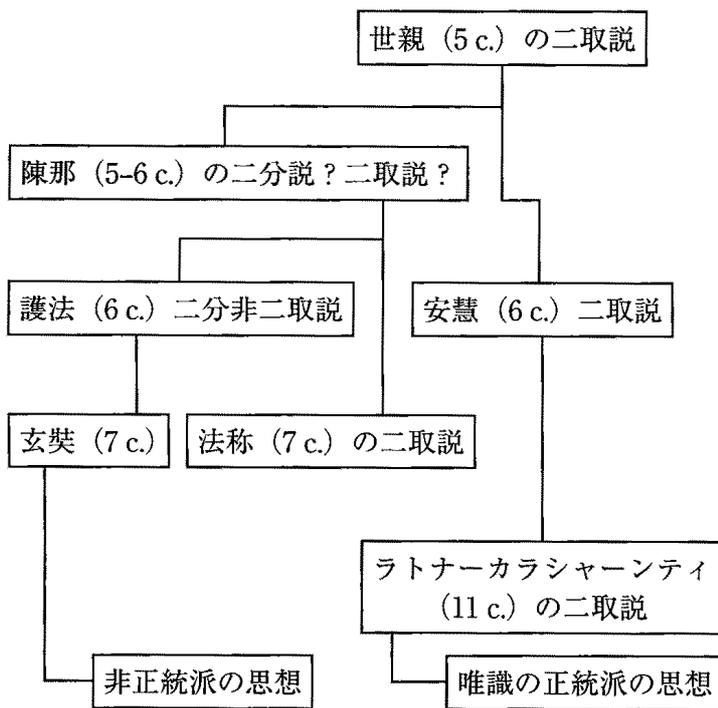
これに対して、世親 (Vasubandhu) は「阿頼耶識が一切雑染の根本なり。」(『瑜伽師地論』卷第五十一、大正三〇、五八一上) という思想を受け継ぎ、識体の雑染説を主張しているが、その考えは『唯識三十論頌』(大正三一、六一上)、『大乘五蘊論』(大正三一、八五〇上)においても説かれている。そして安慧 (Sthiramati) に至っては、世親の識体の雑染説に従い、その二分が遍計所執性の二取 (grāhya-grāhaka-vikalpa<sup>(3)</sup>) であるとまで述べている(『成唯識論述記』卷第一、大正四三、二四一中)。それは凡夫の有漏心を雑染や非真實なものとして位置づけているからであろう。

依他起性の理解に対する世親と陳那の差異について（陳）

一一一

そうであるならば、二分とは果たして安慧に言われたように唯一性の真如と関係なく非存在的なものであるのか、或いは護法に言われたように真如に属する真実なものであるのか。両者の二分に対する認識には大きな隔たりが生じている。

もし阿頼耶識の雑染説から見れば、その虚妄分別 (abhūtaparikalpa) の二分を二取説 (grāhya-grāhaka-vikalpa) として考えるのが自然であろう。次に示した流れのように、雑染の二取説は世親以来の唯識思想における共通的な考え方ではないかと思われる。



この流れから見ると、護法の「二分非二取」説は、世親が代表する正統の唯識思想に背いているのではないだろうか。なお、因縁により生じる依他起性は唯識実性の円成実性とは不一不異の関係を持つという説が早くから無著の『撰大乘論』(大正三一、一四〇下)及び世親の『撰大乘論釈』(大正三一、三四二下)において説かれていたが、その説は唯識学派の共通的な思想であると言っても過言ではないであろう。しかし、二分が依他起性であるならば、円成実性の真如と不一不異の関係になるはずであるが、世親の時代以後、なぜ安慧はそのような二分を真如との関係は異とし、認識的な誤り(例えば繩を蛇と見る)のものとして見なしたのか。世親が依他起性の二取説に対し、もともとそのような見解を持っていたのであるか。そして、一方護法は陳那の三分説に影響され、仏智の二分説を提出するにまで至ったのか、或いは仏智の二分説が彼の独創であるのか。

以上のように依他起性の二分に対し、様々な疑問が生じてくるが、二分に対する認識の違いは護法と安慧の間に存在するだけではなく、もともと陳那の見解も世親のとは違っており、故に護法の仏智の二分説にまで影響を与えたのであろうか。本論文においては、陳那の『仏母般若波羅蜜多円集要義論』(以下は『要義論』と略称)の三性説の研究を通し、彼の依他起性に対する見解を世親のものと比較しながら、その問

題を解きたいと考えている。

## 二 三性に対する世親の超越論と陳那の対治論

陳那は『要義論』においては、般若を通して三性の内容を述べている。<sup>(4)</sup> 般若とは無二の智 (advayañāna)、つまり色の無相分別 (abhāvakaiparāṅga) などという散乱 (viksepa) を止遣させる (vinivaraṇa 取り除かせる)<sup>(5)</sup> 手段とも言えるというのである。また、陳那の三性論は主に「即 (samasta 肯定) と離 (vyasta 否定)」という方法により、認識上の誤りや有無などの概念を阻止する (vipakṣa)<sup>(6)</sup> ものである。例えば、

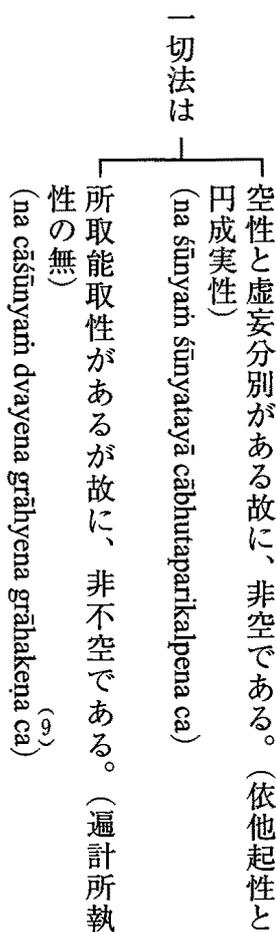
- 1、有相分別 (bhāvasanikalpa) や無相分別 (vidhinabhāvakaiparāṅga) などの遍計所執性について、無 (nasti) によりその存在の有性を否定する。(無の離)
- 2、無実の顕現 (asad eva yatāḥ khyātiḥ) の依他起性について、無明の生起 (avidyāvinirmāṇa) としてその存在の真实性を否定する。(幻の離)<sup>(7)</sup>
- 3、四つの清浄とする円成実性について、不生不滅などの諸法観によりその無有性の (大正二五、九〇七中) 存在を肯定する。(無性の即)

陳那は『取因仮設論』においても、そのような対治論を示している。例えば「身の処に於いて、顛倒して常楽我浄と為すを説くものに、無倒に四念住法を説くことを為すが如き」

依他起性の理解に対する世親と陳那の差異について (陳)

(大正三一、八八六下) とあるが、陳那の般若に対する理解は対治の考え方に傾いているようである。彼の言う止遣 (vinivaraṇa 除去) とは「彼を捨てて而も心に此を取る」ということではなく (大正三一、八八七上)、上で述べたように、般若の「即と離」という手段によって存在に対する全ての分別を対治することなのではないかと考えられる。よって無二智とは、主客観 (相見二分) のような認識上の対立を無くすのみならず、一切の存在に対する相対的考えを止める無分別智のようである。

つまり陳那が『要義論』において言う般若とは、所対治 (vipakṣa) と能対治 (prāipakṣata) の対立を止息 (apākartum) するための働きなのである。<sup>(8)</sup> 彼はこのような三性の対治説によって諸法の不生不滅論 (大正二五、九一一上) を表しているが、それは世親の三性の非有非空論 (大正三一、四六四中) とは違っている。そこで、世親の三性の非有非空論を次のように示してみた。



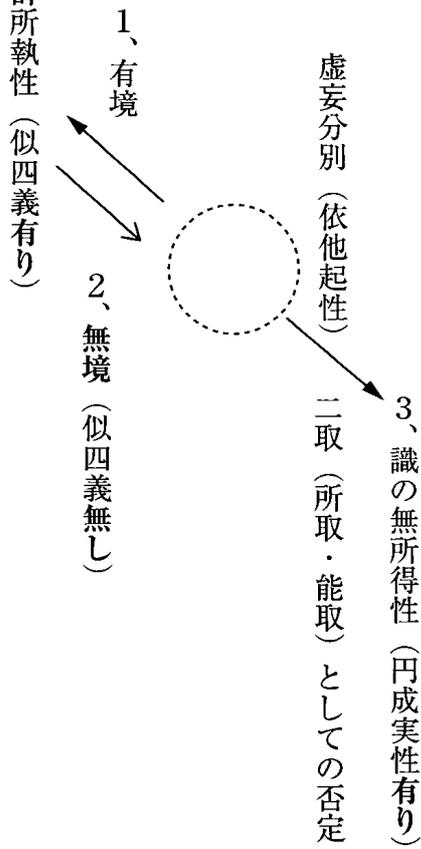
↓結論：「一切法非一向空。亦非一向不空」

依他起性の理解に対する世親と陳那の差異について（陳）

一四

以上のように陳那と世親を比べてみると、陳那の無二有が勿論主客観のみならず、有無相や有無実性などの存在に対する認識も含まれているのに対して、世親の無二取は主に所取と能取という遍計所執性を否定したものである。

言い換えると、陳那は般若を通して、三性が共に空性であるが、使う手段が違うことで不一不異、つまり無二（advaya）の本質として互いに存在し合い、平等なものなのであるという考えを示している。これに対し、世親は遍計所執性の執着を排除しなければ、一切法が非空非有という境界に達することができないというのである。彼はその思想を『弁中辺論』の「入無相方便相」（大正三一、四六五上）においても述べている。例えば世親の入無相の手順を図で表すと、次のようになるであろう。



世親はこのように三層式（1、有↓2、無↓3、有）の入無相方

便（asa-laksanah grhya-grahakayoh pravṛtī）<sup>(10)</sup>において、遍計所執性（似四義有り）を否定してからこそ円成実性が成り立つということによつて、一切法の「非空非有」論を述べている。そして、依他起性は入無相の方便のみであり、世親が究極的に追求する目標ではなく、円成実性への橋渡しの役目に過ぎないのである。この入無相方便の説は、世親の後期の著作である『唯識三十論頌』にも見られる。また彼は『仏性論』において、依他起性とは二取であり、単に世俗諦の次元においてのみ、その存在が認められると述べている（大正三一、七九三下〜七九四上）。

### 三 依他起性と円成実性に対する陳那の見解

陳那は般若の智慧の力によれば、平等かつ清浄な境地を実証することができる（大正二五、九一二中）。そして、「此れ是の如く色を説くは般若波羅蜜なり。」（大正二五、九〇九下）とあるように、円成実性は無二の智として見なされ、即ちそれは般若波羅蜜のことを指している。そして、依他起性と円成実性との関係は、対治される対象（無明による顕現）と対治する無二の智という関係にある（大正二五、九〇九下）。よつて依他起性が有か無かと言うためには、円成実性の表現と一緒に考えなければならぬようである。

このような考え方は実は無著の時代にまで遡ることがで

き、例えば、無著は「若し依他性無ければ真实性も無く、一切の無とはありえない。」(大正三一、一一〇中)と述べ、依他起性の存在こそが真実の真如を存在たらしめるということを明言している。また「此の二若し異ならば、法と法性とも亦応に異りあるべし。」(大正三二、三四二中)という見解を示し、依他起性が円成実性と不離の關係を持つて存在するとも考えているようである。

それ故に、陳那にとっては三性は対治の働きとして違う役目を担っているが、同時に同じ般若の空性に所屬するものであるので、三性は三無性として平等なのである。これに対して、世親の三段階の三性説は遍計所執性が除かれてから、依他起性と円成実性とが不一不異の關係に達するといっているのである(大正三一、三四二下)。

なお、無著の依他起性と円成実性が不異の關係であるという思想は、彼の重要な学説「染淨二分依他起性」(大正三一、一四〇下)に深く関わっているが、それは世親の思想の中に存在していないと指摘されている<sup>(11)</sup>。

#### 四 結び

以上のように、陳那は無二の智(advayajñāna)によって三性を観ている。三性は般若の対治する手段としては高低なく平等であり、このような般若の境界から依他起性と円成実性

の關係を見る方が不一不異の關係であるということが理解されやすいであろう。

一方、世親が三性を入無相方便の超越論として、雑染の心識から清淨の境界にまで三種の段階によって修行の次第を示している円成実性は究極の境界であり、依他起性は雑染の識体によって形成される虚妄の存在なのである。依他起性と円成実性の關係については、雑染と清淨という相待的な解釈<sup>(12)</sup>、つまり両者を異に解釈する方が理解されやすい。即ち依他起性は煩惱が抱える識体より顕現する虚妄分別(abhūtaparikalpa)の存在であるので、円成実性に対しては無の存在であると理解され、その方が安慧等の仏無(実の)二分説や仏無説法論も非常に形成されやすく、やがて唯識学派の一大思想になったのではないか。

そのような流れの中で、護法は陳那のこのような非即非離の三(無)性論の影響を受け、依他起性と円成実性と不異との關係を強調している。また、識を依他起性として成立した「離有離無」という契中道(大正三一、三九中)を立て、更に仏智の有二分説や仏の説法論を提出するに至ったようである。陳那が護法の勝義諦の仏智有二分説を支持するかどうかは分からないが、般若の三性の平等觀から見れば、依他起性の二分と真如という不異の關係について、確かに護法に理論上の根拠を与えたのではないかと考えられる。その意味で護

依他起性の理解に対する世親と陳那の差異について(陳)

依他起性の理解に対する世親と陳那の差異について（陳）

一六

法の仏智の二分説は陳那の思想によって発展されたものではないかと結論づけたい。

- 1 影印北京版西藏大藏經、第五七二〇、九六頁三〜五行目。
- 2 Masaki Hattori, *Dignāga, on Perception* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1968) 二九頁及び一八三頁を参照。
- 3 Gadjin M. Nagao, *Madhyāntavibhāga-bhāṣya* (Tokyo: Suzuki Research Foundation, 1964) 一八頁。
- 4 Giuseppe Tucci, "Minor Sanskrit Texts on the Prajñā-pāramitā: The *prajñāpāramitāpīṇḍārtha of dīnāga*," *Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland*, parts 1-2, 1947 (以下「Tucci と略称する」) 五七頁、第二八頌。
- 5 Tucci, 五七頁、第三一頌。yathādivākye niṣpannaparatantapari-kalpīnah / abhāvakalpanārpariviksepavinivaraṇam // 色など一切が全く無であると分別し散乱するのを無相分別散乱というのである。宇井伯壽『陳那著作の研究』（岩波書店、一九五八）三〇〇頁を参照。
- 6 Tucci, 五七頁、第三〇頌。
- 7 Tucci, 五八頁、第四二頌「此無実所現、彼無明所起」(asad eva yatāh khyāti tad avidyāvīnimittam)。
- 8 Tucci, 五七頁、第二〇頌。
- 9 Nagao, *Madhyāntavibhāga-bhāṣya*, 一八頁。
- 10 Nagao, 二〇頁。方便 (upāya) とは①識有境無②境無識無の順序で観行を行なう意味である。
- 11 勝呂信静「唯識説の体系の成立」『講座大乘仏教』八、春秋社、一九八二、一〇〇〜一〇二頁。

12 真諦訳『撰大乘論釈』巻第五、「此空即是色無所有。不如依他性於真实性不可説一。由清淨不清淨境界故。」(大正三一、一九〇上)。

〈キーワード〉 無二の智、依他起性、二分

(台湾輔仁大学非常勤講師)